

天使たちの課外活動7

ガーディ少年と暁の天使（上）

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

天使たちの課外活動7

ガーデイ少年と暁の天使（上）

ロボ・モリエンテス●五百年ほど前に二十四歳で亡くなった天才画家。

作品数が少なく、『野兎』三部作が特に有名。

グッテンベルク●妖精の作者。骨董宝飾品の巨匠。

レニエ●蝶の作者。骨董宝飾品の巨匠。

アッシュクロフト●チェストの作者。惑星ロスタで木工の神と呼ばれた職人。

ギボンズ●角灯の作者。高い技術と優れた芸術性が評価されている。

エタン・デュフィ●『革命の薔薇』の作者。伝説的な硝子工芸家。

パークス●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。
キャップ。

アレンビー●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

オコーナー●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

キンケイド●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

ジョン・ファレル●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

ナッシュ●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

ビル・キンケイド●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

ファレル●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

マクミラン●『暁の天使』とアガサが出荷する卵の運搬業者のひとり。

チャールズ・シンクレア (チャーリー)●シティでは知らぬ者のない名店『ミヨン』のオーナーシェフ。魚料理を得意とする。

バート・ニルソン●テオの限定期間終了後のポワール・シティ・ホテルレストラン料理長候補のひとり。チャールズの弟子。

ザック・ラドフォード (ラド)●同じくシティ名店の『ザック・ラドフォード』のオーナーシェフ。肉料理を得意とする。

ジャイルズ・マッケイ●テオの限定期間終了後のポワール・シティ・ホテルレストラン料理長候補のひとり。ザックの弟子。

ダグ・ベンソン●『テオドール・ダナー』菓子担当。

エセル・ヒューズ●『テオドール・ダナー』パン担当。

トム、ルパート、アドルフ、ロッド、ジョン●バートとジャイルズの補佐。

登場人物・関連地域等紹介

ルーファス・ラヴィー（ルウ／ルーファ） ●期間限定店『テオドール・ダナー』の手伝い。偏屈なテオと会話出来る貴重な人物。普段は連邦大学惑星にあるサフノスク大学に通っているが、実は宇宙創造にかかわる人外生命体ラー一族。

ヴィッキー・ヴァレンタイン（リィ／エディ） ●ルウの相棒。中学生にもかかわらず、なぜか一流の戦士の腕と魂を持っている。ルウと同様に、偏屈なテオと会話出来る貴重な人物。

シエラ・ファロット ●ルウとリィの仲間。中学生だが、なぜか暗殺技術は超一流。やはりテオと会話出来る。

テオドール・ダナー（テオ） ●料理店『テオドール・ダナー』を営む。現在、連邦大学惑星の店舗が建て替え中のため、期間限定でセントラル中央座標に出店することに。料理の腕は天才的だが、料理以外のことにはとことん頓着しない。

アンヌ ●テオの奥さんで『テオドール・ダナー』を支えていたが病死。パラデューの娘。

ヨハン ●テオの息子。父親の補佐で苦勞している。ルームサービス用調理担当。

カトリン ●ヨハンと結婚。娘のアンヌは三カ月の乳児。

シメオン・パラデュー ●投資家兼実業家。連邦でもっとも著名な投資家十人にも選ばれている有名人。テオの義理の父親。

ゲルハルト・スタイン ●近代美術が専門の教授。ドミニク研究の大家として知られる。

アルフォンス・ブライト ●エレメンタル近代美術館館長。

マイケル・モリス ●エレメンタル近代美術館副館長。

フレデリック・シーモア ●エレメンタル近代美術館前館長。

ドール・ドミニク・アンリコ ●画家。『暁の天使』の作者。人類の至宝とも謳われる『暁の天使』は通常、エレメンタル近代美術館に展示されている。

ミシェル・ポワール●ポワール・シティ・ホテルの支配人。テオと
アンヌの古い知り合い。

ミック●ミシエルの甥。『テオドール・ダナー』配膳のバイト。

フィリップ・ポワール●ミシエルの父親。一代で財産を築いた大実業家。

エメリーヌ・ポワール●ミシエルの母親。

アガサ・マーシャル●^{ティラ・ポーン}連邦大学惑星のコートニー地方在住。香草や
鶏を育てることを趣味としている老婦人。

ソール・レン●天然物にこだわる^{セントラル}中央座標の漁師。テオに魚をおろ
している。

マヌエル・シルベスタン二世●元連邦主席。現連邦主席の実の父親。

マヌエル・シルベスタン三世●現連邦主席。

ジャンヌ●パラデューの娘でテオの義理の妹。

ウォーレン・ミッチェル●ジャンヌの夫。実業家。

バーニー・エリクソン●ジャンヌの知り合い。資産家。社交界の著名
人。

ソフィア・エリクソン●バーニーの奥さん。慈善活動に熱心。

トム・コリンズ●^{セントラル}中央座標通信社のシティ本社専務。

ネイト・フィッツジェラルド●^{セントラル}中央座標通信社のマース支局次長。

^{セントラル}**中央座標**●正式名称は惑星セントラル。共和宇宙の政治経済の中心
地。

ヴェリタス●^{セントラル}中央座標にある大陸。

シティ●^{セントラル}中央座標の中にある都市。主要行政機構が集中しており、
この街へ入るための審査は宇宙一厳しい。

エレメンタル近代美術館●^{セントラル}中央座標で最大の美術館。収蔵品の質量
ともに連邦屈指の規模を誇る。

ポワール・シティ・ホテル●^{セントラル}中央座標にある高級ホテル。ただし開業
は3カ月先の予定。

連邦大学惑星●^{ティラ・ポーン}中央座標とは恒星間距離にある惑星。

マース●合衆国。共和宇宙で一、二を競う超大国。

カレイラ●ポワール一家の出身惑星。

1

連邦大学惑星レゴン州、コートニーという地方の緑豊かな山腹に、小さな家がぼつんと建っている。

見渡す限り、他に人家はない。

家の周りには草むらの平地が広がり、放し飼いの鶏たちが草や虫を食んでいる。

アガサ・マーシャルは夫を亡くして以来、一人でこの家で暮らしていた。

アガサの朝は早い。夜明けと同時に山に分け入り、季節ならば山菜を摘み、山の手入れをし、戻ったら香草の畑と鶏の世話をするのが日課だ。

夫の年金があるので、ほぼ自給自足の生活ながら、彼女の暮らしぶりには余裕がある。時には町へ出て、友人たちのおしゃべりや買い物を楽しんでいる。

とはいえ、日常的に人と会うことはほとんどない。そんなアガサの生活に、ここ数日、大きな変化が生じていた。

朝の九時頃、屈強な男たちが彼女の家を訪れ、礼儀正しく声をかけた。

「今日の分の卵をいただきに参りました」

ここ数日、これが日課になっている。

「はい。用意できていますよ。——あら？」

アガサは笑顔で運送業者を迎えたが、ちよつと戸惑い顔になった。

「昨日までの方とは違うのね？」

この二日間、同じ顔ぶれの二人が家に来ていた。

二人ともまだ二十代と若く、中背で、肉体労働にしても、がっしりした体軀で、無愛想に見えるほど表情が動かず、目つきも鋭い。

独り暮らしの老婦人が警戒しても当然の強面だが、アガサは屈託のない笑顔で応対していた。

今日の二人は、どちらも三十代に見える。

一人は丸顔で一人は四角い顔だが、二人とも首は太く、胸板は分厚く、昨日までの二人と比べても、さらに体格がいい。

背が高いというより『大きい』『威圧感がある』と表現したほうがぴったりの二人だった。

丸顔のほうが制帽の庇に手をやり、軽く頭を下げた。

「自分たちはいくつかのチームで動いていますので、また違う人間が来ることもあるかと思えます。この帽子と制服を目印にしてください」

「ああ、そうなんです。——それじゃあ、今日はあなたたちが中央座標まで行くのかしら？」

「そうです」

「お名前を伺ってもよろしい？」

「自分はパークス、こちらはオコーナーです」

「ご苦労さまです。わたしはアガサ・マーシャル。

よろしくお願いしますね」

アガサは笑顔で挨拶すると、用意しておいた箆を

パークスに差し出した。

産みだての卵が二十個ほど盛られている。

梱包もしていないが、それでいいと言われている。

突然、旧友の息子から連絡をもらった時は本当に驚いた。

「父がアガサさんの卵を使いたがってるんです」

旧友のテオドル・ダナーは料理人で、アガサの鶏たちの卵を、他のどの卵よりも美味いと評価してくれている。使いたいと言ってくれるのは嬉しいが、彼の店は現在、建て替え中のはずだ。

テオドルも息子のヨハンも今は中央座標にいて、仮店舗で仕事をしていると聞いている。

中央座標の正式名称はそのまま惑星セントラル。

文字通り、共和宇宙の政治経済の中心地だ。

一方、アガサがいるのは連邦大学惑星。

正式名称は惑星テイラ・ポーン。外洋型宇宙船を使わなくては行き来できない距離である。

交通技術が発達した現在、無理をすれば日帰りも

不可能ではないが、現実的ではない。

アガサの戸惑いを察し、ヨハンも困惑したように言ってきた。

「……交通費だけでもいったいくらかかるかと思うんですけど、親父は言い出したら聞かないし、母さんが生きていたら、きっと同じことをしたと思うんで……すみませんが、よろしくお願いします。ラヴィーさんが業者を手配してくれたんで、毎日、そちらまで卵を取りに行ってくれるそうです」

「毎日？　うちの卵を中央座標^{セントラル}まで？」

アガサの眼がまん丸になる。

「でも、うちの卵はそんなにたくさん取れないのよ。多くても一日に三十個くらいしか……」

「親父はそれでいいって言ってます。アガサさんが食べる分はもちろん、残しておいてください」

「待ってちょうだい。まさか、たったそれだけの卵を毎日、国外発送するというの？」

採算が合わないにも程があるが、ヨハンは再び、

きっぱりと言った。

「母さんならやります」

アガサは吐息を洩らした。

「……そうね。アンヌならきつとやるわ」

テオドールの妻のアンヌは夫に満足のいく仕事をさせるためには手間も費用も惜しまなかった。

納得しつつも、アガサはまだ疑問を述べた。

「でも、それなら毎日送らなくてもいいんじゃないかしら。卵は、料理によつては何日か置いたほうが美味^{おい}しくなるもの。百個くらい集めてからまとめて送ったほうが……」

「うちの親父なら、同じ日付の卵でも、いつが一番美味しいのか、卵の状態を見て判断すると思います。俺にはできないことですけど、親父ならやります」

再び、嘆息である。

「ええ。テオならやるわね……あの人は妥協という言葉を知らないもの。こと料理に関しては」

「そうなんですよ」

ヨハンも父親の性格を知り抜いているだけに、同意しながらも諦めている口調で言ってきた。

「アガサさんの卵だけを使うわけじゃないんですよ。こつちでも卵は他にちゃんと手配してるんですけど、親父はアガサさんの卵がある程度、手元に確保しておきたいんだと思います」

微笑したアガサだった。

「そこまでテオに評価してもらえないのはありがたい限りだわ。あなたのほうは、調子はどう？ 大きなお店なんでしょう？」

ヨハンの声も苦笑している。

「もう、てんてこまいですよ。連邦大学とは材料も全然違うし、その分、やりがいもありますけど」

「あなたなら大丈夫よ。頑張って」

励まして、アガサはちよつと不安そうに言った。

「でも、もう一つ心配なの。卵は振動に弱いのに、宇宙船に乗せたりして、大丈夫かしら？」

「それもラヴィーさんが言っていました。運送業者に

お願いして特別な入れ物を用意してもらおうそうです。俺も知らなかったんですけど、卵に極力振動を与えないように固定して運べる入れ物があるんだそう。だから、アガサさんは荷造りとかしくなくていいんで、卵を集めるのだけお願いします」

「まあ、そうなの？」

ヨハンが言ったとおり、一昨日も今朝も、運送業者の男たちは専用の容器を持参してきた。

縦横高さ、それぞれ70センチほどもある、大きな箱だったが、蓋を開けると、内部は驚くほど狭く、せいぜい40センチ立方くらいの容量しかない。

一昨日の二人はその性能を丁寧に説明してくれた。蓋を閉めて施錠すると、三方から極小の粒子が噴出して、中身を完全に固定します」

「密閉するわけではありません。空気は通しますし、温度・湿度も適度に保ちます。卵が変質することはまずありません」

「解錠すると、粒子は気化して内壁に吸収されます。

蓋を開けた時には卵だけが入っている仕組みです」

「まあ……。ですけど、これ……」

予想以上に仰々しい容器的登場にアガサは眼を丸くして、男たちに問いかけた。

「……どう見ても、卵用じゃありませんよね？」

「はい。従来は硝子や粘土細工など、強度に欠ける美術品を運搬するためのものです」

「……ですよねえ」

まさか箎に盛った卵を詰め込む羽目になろうとは、運送業者にとっても予想外の事態だったろう。

今日はパークスが箎を受け取った。その時には、オコーナーが保管箱の蓋を開けて待っており、箎を納めて慎重に蓋を閉めた。

内部の様子は見えないが、やがて蓋に『保管完了』と表示が出る。

これが動かしてもいい合図なので、オコーナーは軽々と箱を持ち上げた。

箱自体に相当な重量があるはずだが、その重さを

少しも感じさせない。

パークスが再び制帽の庇に手をやって、アガサに挨拶し、背を向けようとした時だ。

アガサは別の大きな籠をパークスに差し出した。

「これも持つて行ってくださいな。——うちの山で取れた山菜と、わたしが育てた香草なんです」

蓋付きの籠なので中は見えない。

しかし、卵以外の輸送は請け負っていない。

パークスは確認する眼差しをアガサに向けた。

彼の雇い主はこの老婦人ではなく、別の人物だが、今そちらに確認をとるわけにはいかなかったからだ。

アガサは微笑して頷いた。

「テオはきつと喜んでくれるはずですから。お願いします」

どのみち同じところに行くのだ。かたくなに拒否するのもおかしな話である。パークスは無言で頭を下げて籠を受け取り、アガサの家を出た。

家から少し離れたところに造成された広場があり、

二人はそこに乗り物を止めていた。

車ではない。四人乗りの小型飛行機だ。

それも、ただの小型機ではない。離発着の際にもほとんど音をたてない無音の垂直離着陸機である。

これはれっきとした軍用機だ。

間違つても『町の運送屋さん』が『卵の運搬』に使うような代物ではないが、二人は慣れた様子で、機体の後部座席に荷物を載せた。

保管箱も籠も安全帯で固定した後、オコーナーが操縦席に座り、パークスが助手席に着く。

垂直離着陸機はその性能を存分に發揮して、ごくわずかな音をたてただけで、ふわりと地面を離れ、静かに空中を進んでいった。

やがて最寄りの宇宙港が現れた。小規模ながら、設備は整っている宙港だ。その地上に、格納庫扉を開いた三万トン級の外洋型宇宙船が待機している。

オコーナーはなめらかな動きで高度を下げていき、滑り込むように格納庫扉の中に小型機を進入させて、

定位置に着地した。

格納庫内に待機していた男が、停止した小型機の固定作業を手早く済ませる。

小型機から降りたパークスが格納庫扉を閉めた後、操縦室に合図を送る。既に発進準備を済ませていた三万トン級の宇宙船は、ゆっくりと大地を離れた。

普段はもつと急上昇して大気圏を抜けるが、今は極力荷物に衝撃を与えないよう、まるで豪華客船のような慎重な離陸である。

パークスとオコーナーは小型機から荷物を下ろし、同じ格納庫内の車に積み替えた。

これから行く場所では陸路しか使えないからだ。行き先は中央座標のシティ。

文字通り、共和宇宙連邦のお膝元である。

よほどの緊急事態でない限り、シティの上空を飛ぶことは許可されない。

この時、パークスが保管箱を、オコーナーが籠を持っていった。籠の中身は葉物だと聞かされていたが、

個別に固定したほうがいい場合もある。

確認しようとして籠の蓋を開けたオコーナーは、無表情のままパークスと呼んだ。

「キヤップ」

その口調に小さな異変を感じて、パークスは彼の視線の先を確認した。

籠の中には確かに山菜と香草が入っていた。

正しくは山菜と香草『も』と言うべきだろう。

大きな籠の半分くらいの容積を占めていたのは、プラスチック製の食品保管容器に入った料理だった。

オコーナーはそれらを一つずつ取り出した。

大量のサンドイッチ、チキンナゲット、数種類のパイ、スティック状の野菜、切り分けた果物等々。

きちんとした文字のメモが同封されていた。

『皆さんで召し上がってください。籠と容器は明日返してくださいね』とある。

パークスは小さく唸った。

「……確認せずに受け取った俺の失敗だ」

アガサ・マーシャルは典型的な『善良な一市民』である。

卵の『配達』に外洋型宇宙船で恒星間を移動する（それも連日）業者の人たちに感謝の意を示そうと、自分なりに労おうとしたのだ。

オコーナーがやはり無表情に質問する。

「廃棄しますか？」

「いや、待て」

パークスは格納庫に待機していた男に言った。

「確認しろ」

「はい」

男は船内に走り、すぐに本格的な検査用具一式を持って戻って来た。

オコーナーと手分けして、容器の中身を一つずつ、何種類もの検査に掛けていく。

やがて結果が出た。

「毒物反応、陰性」

もう一人もオコーナーに続く。

「細菌反応、陰性」^{ネガティブ}

さらに検査を重ね、再びオコーナーが言った。

「危険物質反応、陰性」^{ネガティブ}。オールクリアです」

パークスが確認するように問いかけた。

「つまり、これは？」

「弁当です。ただの」

「……………」

パークスは何とも言えない顔で沈黙した。

オコーナーも、もう一人の男もだ。

その男が、ぼそりと言う。

「今の自分たちは民間の運送業者ですからね」

オコーナーが続けた。

「荷物を届ける時、引き取りに行く時、依頼人から

差し入れをもらうこともあります」

「常連ならなおさらで、一般的なのは飲み物ですね。

珈琲^{コーヒー}とか炭酸飲料」

パークスが苦い顔で言う。

「比べると、量が桁違いだがな……………」

「美味そうですね」

「安全は確認されました」

オコーナーともう一人の男は自分たちで検査した

食べ物を見つめ、指揮官を見た。

パークスは熟考の末、苦しげに答えを出した。

「せっかくのご厚意を無下に^{むげ}にするわけにはいかない。

——マクミラン」

「はい」

「操縦室のナツシユにも持って行ってやれ」

「了解」

翌朝、アガサ宅を訪れたパークスはオコーナーの

他にナツシユを連れて行った。

今までは二人で卵を取りに来ていた。実際、手は

それで足りるのだが、応援として連れてきたのだ。

ナツシユは気のいい陽気な男だが、隊員の中でも

ひととき大きな体格で、浅黒い肌^{いしか}に顔立ちも厳つく、

目つきも鋭い——というより悪い。

はつきり言つて存在自体が怖い。

パークスもオコーナーも大柄だから、壁のように立ちはだかる強面三人は大変な迫力である。

よほど腕っ節に自信のある荒くれ男でも、単独でこの三人に立ち向かうのは尻込みするはずだ。

パークスは籠と容器をアガサに返して、控えめに、だが、きつぱりと言つた。

「今後はこういうことは遠慮させてください」

凄みさえ込めた口調だったはずだが、華奢な老婦人はそんなじよそらの無頼漢より遥かに強かつた。

にこにこ微笑みながら、昨日と同じように葉物と食べ物のぎつしり詰まった別の籠を差し出し、拒否されるとは端から考えていない口調で言つてきた。

「ご迷惑かしら？」

実はまったくもつてその通りなのだが、迷惑だと言つてしまつたら、この善良な女性の気持ちを踏みこじることになる。

しかし、ここで新たな籠は受け取れない。

パークスも拳を握りしめて踏ん張つた。

「連日こんなことをしていただくのでは、それこそ迷惑になります」

「あら、ですけど、わたし一人ではとてもこんなに食べられませんもの。もうつくつてしまつたのだし、助けると思つて受け取つてくださいませんか？」

懇願する口調だが、顔には笑みがある。

「お氣遣いなく。お弁当の代金はちゃんともらつていますから」

パークスは驚いた。

「誰からです？」

「あなたたちの雇い主から」

「……………」

いったい誰のことを言っているのか、パークスは訝しんだ。

今の自分たちはいわば『出向』として外部に貸し出されている身である。

もともとの『雇い主』は共和宇宙の誰もが知る大

物政治家だ。彼がこんな一地方の民間人に接触などしたら大騒ぎになってしまう。

第一、元の雇い主は自分たちを雇っていることを極秘にしている。

必然的に今の、臨時の雇い主ということになるが、パークスはその人物をよく知らなかった。

アガサはパークスの葛藤かっとうなど知るよしもない。

ちよつと困つたように頼み込んできた。

「宇宙船で行かれるなら、場所はありませんでしよう。この山菜と、うちの香草はどうしても持つて行つてもらわないと。昨日の分もテオがとても喜んでいたので、そうなんですよ。——ですから、はい」

あらためて籠かごが差し出される。

ここで『葉物だけ』受け取つて食品保管容器を残らずに出すのは——人としてあるまじき行為こういだ。

何より今の自分たちは民間の運送業者なのだ。

この状況で、あくまで差し入れを拒むのは普通の運送業者としては、いささか奇異きぎな行動である。

下手へたをすると、この老婦人に何らかの異変を感じさせることにもなりかねない。

どんなに不本意でも受け取らざるを得なかった。

アガサは返された籠かごを開け、きれいに空からになった容器を見て嬉しそつだつた。

「お口に合つたかしら？」

パークスは諦あきらめの境地に達して言つたのである。

「こんなに美味しい料理は初めてでした」

嘘うそでも追従ついででもなかった。

彼の横でオコーナーとナツシユも頷うなづいている。

肉体労働なので、彼らは皆、よく食べる。

もちろん粗食に耐える訓練はしているし、必要であれば何日も非常食だけで過ごすことも珍めづしくない。

だからこそ、久々に味わう手料理は涙が出るほど美味うまいかつた。

アガサは本当に嬉しそつに、にっこり微笑ほほえんだ。

「わたしの料理はテオの足下にも及ばないけれど、気に入つてくださつて嬉しいわ」

「テオドル・ダナーのことですか」

「そうよ。あなたたちが毎日卵を運んでくれているレストランの料理長。あの人の腕こそは神の御業ね。比べられても困るけれど、皆さんも一度、味わってみるといいと思うわ」

パークスは正直に言った。

「自分は神の御業よりも、あなたのご親切に感謝します」

「お礼を言うのはこちらのほうですよ。これからもよろしくお願いします」

保管箱は今日もオコーナーが持った。

ナツシユは手ぶらのまま、軽く頭を下げて、出て行こうとしたが、その彼をアガサが呼び止めた。

「ちよっと待って」

奥に引っ込んだかと思うと、少し大きめの茶色の紙袋を持って戻って来る。

「これも持って行ってくださいな」

紙袋から何ともいい匂いが漂ってくる。

受け取ったナツシユが袋の口を少し開けてみると、

中身はフライドポテトだった。それも揚げたてだ。

「ちよんどよかった。たった今揚げたばかりなの。

温かいうちに食べてくださいな」

ナツシユはこれまで数え切れないほどの修羅場をくぐってきた男だ。パークスもオコーナーも、宇宙船で待機しているマクミランも、いずれ劣らぬ百戦錬磨の猛者たちである。これまでどんな難敵にも屈したことはない。

その彼らが、眼の前でここにこ微笑む老婦人には白旗を揚げざるを得なかった。

ナツシユは大きな手に紙袋を捧げ持つようにして、何とも言えない口調で言った。

「ありがたく、いただきます」

三人は昨日と同じように垂直離着陸機まで戻り、卵を後部座席に固定すると、今日はその足下に籠を据えた。紙袋を抱えたナツシユが保管箱の隣に窮屈そうに納まり、操縦席にはオコーナー、助手席に

パークスが着く。

後は発進するだけという時になって、後部座席のナツシユがおもむろに紙袋の口を開けた。

当然、揚げたばかりの芋の匂いが機内に充満する。誰しも覚えがあるだろうが、こんなにも香ばしく食欲をそそる匂いは滅多にないのだ。

パークスは顔をしかめ、振り返って注意した。

「ナツシユ」

袋の口を開けたまま、強面の部下は困ったように言ってきた。

「冷めたら美味くないです」

「だめだ。検査していかないものを口にはできない。

服務規程違反だぞ」

操縦席のオコーナーがパークスに声をかけた。

「キヤップ」

彼がポケットから取り出して差し出してきたのは、簡易の検査用具一式である。

パークスは片方の眉をちよつと吊り上げた。

荷物を受け取るだけなら必要のないものだからだ。

なぜこれを持つてきたのか問いただそうとするも、いつもほとんど表情を変えない部下は、この時も真顔で言つてのけた。

「芋はあつたかいほうが美味しいです」

真理である。

パークスは複雑な顔で用具をナツシユに手渡し、ナツシユは黙々と紙袋の中身を検査した。

その間に、オコーナーは機体を離陸させている。

検査の結果はもちろん異常なしだ。

ナツシユはパークスに検査用具を返すと、何やらがさがさ音をたてていたが、前席のパークスの顔の横に何かを、ぬつと突き出してきた。

見ると、軽食スタンドでよく見る紙筒である。

その中にフライドポテトを山盛りにしてある。

「小分け用のが中に入っていました」
至れり尽くせりである。

操縦席のオコーナーが言った。

「俺の分も頼む。高度が安定したら食べる」

「了解」

律儀なナツシユは別の紙筒に芋を山盛りにして、

後部座席で待機している。

紙筒を受け取ったパークスは、半ばやけくそで、フライドポテトを口に放り込んだ。

「……この機内で民間人の手作りを食う羽目になるとは、前代未聞だぞ」

後部座席のナツシユが真面目に言ってくる。

「でも、美味しいです」

かくて、軍用機としてあるまじきことながら、三人と卵と山菜を乗せた垂直離着陸機は、揚げたてのフライドポテトのいい匂いを機内に漂わせながら、空を飛んでいった。

2

開店初日を迎え、給仕係一同は緊張気味だった。今日初めてお客さまを迎えるのだ。緊張するのも無理はないが、理由は他にもあった。

彼らが働く店は、三カ月後にポワール・シテイ・ホテルとして開業する建物の屋上、その空中庭園の中につくられている。

この立地だけでも、町の食堂とは桁違いの料金が発生するのは明らかで、客層のほとんどを富裕層が占めるのは最初からわかっていたことでもある。

しかし、それを踏まえても、先程から来店されるお客さまの顔ぶれがただごとではないのだ。

お客さまの詮索をするのも、肩書きでお客さまの差別をするのも給仕係は慎まなければならぬが、

そんな慎みを忘れてしまえばそうになるくらい、社会的地位の高い人たちが続々と来店してくる。

ホテルオーナーのミシエル・ポワールの甥で給仕係の一人として入っているミックはまだ若く、巨大財閥の役員顔や名前はわからなかったが、そんな彼でも知っている著名人もやってきた。

興奮を抑えきれない口調で同僚に囁いた。

「——今来たの、アレックス・ゲイです。業界では有名な遊戯制作者ですよ」

同僚も驚きを隠せない口調で言う。

「お連れさまもすごいぞ。そのアレックスと組んで何作もヒット作を飛ばしている制作者だ」

「えっ?! ほんとですか」

他にも元連邦議會議員、大企業の社長・会長など、そうそうたる顔ぶれである。

その人々を入り口で出迎えているのは黒服に身を包みながらも、長い黒髪を首の後ろで束ねた学生のような若い男だった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。